

アシステック通信
ASSIS TECH

特集 “ユニバーサル社会の
環境整備”



2005

目 次

特集「ユニバーサル社会の環境整備」

- (1) 福祉のまちづくりセミナー開催の主旨 1
あいさつ 兵庫県社会福祉事業団 永井 光明
- (2) 基調講演 ～心の絆～ 3
エッセイスト 鈴木 ひとみ
- (3) パネルディスカッション
～ユニバーサル社会の環境整備～ 5
兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所 多淵 敏樹
- (4) パネルディスカッション ～「ひと」という視点から～ 6
エッセイスト 鈴木 ひとみ
- (5) パネルディスカッション ～「公共トイレに共通ルールを」 8
TOTO UD研究所 竜口 隆三
- (6) パネルディスカッション
～ユニバーサル社会における「まちづくり」～ 10
(株) コー・プラン 天川 佳美
- (7) パネルディスカッション ～自分に何ができるか～ 12
国立神戸視力障害者センター 今井 裕二
- (8) パネルディスカッション
～ユニバーサル社会における「情報」について～ 14
兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所 北山 一郎

ニュース&トレンズ 16

第31回国際福祉機器展 参加報告

兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所 小山 美代

アシステック掲示板

第4回公開講座を開催して

What's ASSISTECH?? 「アシステック」とは??

障害者や高齢者等を幅広く支援する技術という意味でアシスティブ・テクノロジーからつくった言葉です。福祉のまちづくり工学研究所は、福祉のまちづくりを実現する技術的中核施設として、総合リハビリテーションセンター内に設置されています。“開かれた研究所”をめざしておりますので、ご意見や研究の参画希望などがありましたら、お気軽にお寄せください。

セミナーの開催

第12回福祉のまちづくりセミナーが12月3日「ユニバーサル社会の環境整備」をテーマに六甲アイランドのベイシェラトンホテルアンドタワーズで開催されました。

今回は、事業団、兵庫県、そして第4回全国障害者芸術・文化祭の開催実行委員会と「障害のある方への声かけ運動」推進会議の四者共催となりました。

当日は、「しあわせ会」「障害のある方への声かけ運動」推進会議の皆様を始め、「県立神戸高等技術専門学院」の学生の方など多くの分野の方々に参加いただき、永井兵庫県社会福祉事業団理事長のあいさつのあと、基調講演に鈴木ひとみさまをお迎えして「心の絆」を、また「ユニバーサル社会の環境整備」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

引き続き、「障害のある方への声かけ運動」推進会議事務局長の田中啓介さまから「障害のある方への声かけ運動の取り組み」についてご報告がありましたので抄録集としてご紹介します。

ごあいさつ

社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団
理事長 永井光明

県立福祉のまちづくり工学研究所は、平成5年に兵庫県が設置しまして、兵庫県社会福祉事業団が運営を行っています。

高齢者の方、障害者の方々の生活を支援する機器・福祉用具の開発、コミュニケーション機器・システムの開発やまちづくりといった幅広い研究開発を行っている全国的にもユニークな研究所です。

具体的には、大腿切断をされた方に、IT技術を使ったインテリジェント義足の開発、聴覚や視覚に障害がある方々のコミュニケーションを支援する機器、認知症等の方々に徘徊をされる徘徊者に対する見守りシステムなど先導的な研究開発を行っています。

このセミナーは、研究所の成果の一端を皆様方にお伝えするとともに、福祉のまちづくりについて皆様と議論し、一緒に考える場です。

今回のテーマは、「ユニバーサル社会の環境整備」としております。

兵庫県では、福祉のまちづくりの実績、あるいは震災の教訓といったものを踏まえ、人々が地域のなかで支えあい、安心して暮らし、いきいきと活動できる「ユニバーサル社会」を推進しています。

このセミナーも「ユニバーサル社会の環境整備」というテーマで、皆様と一緒に考え、今後のユニバーサル社会づくりに反映していきたい、ともに力をあわせて地域づくり、社会づくりに取り組みたいというのが趣旨です。



基調講演の発言要旨



エッセイスト ^{すず} 鈴木 ^き ひとみ

1981年ミス・インターナショナル日本代表に選ばれる。同年モロッコで行われた「ミス・インターナショナル世界大会」に出場し、ミス・エレガンスに選出される。83年上京し、ファッションモデルとして活躍。84年に交通事故に遭い頸椎を骨折。現在は執筆・講演活動のほか、洋服メーカーのモデルとアドバイザー、企業のバリアフリーのアドバイスなどを行う。2004年射撃でパラリンピックに出場。著書に「一年遅れのウエディングベル」「命をくれたキス」等多数。

「心の絆」

「人はパンだけで生きていくことはできない」

あなたの生きがいは何ですか？と尋ねると、子供、仕事、趣味、…いろいろあるでしょう。では、生きていくための支えは何でしょう？

私は「だれかに必要とされている」こと。

けがをして車椅子生活になったのが22歳のとき、もう20年になる

医師から「もう一生歩けません」と聞かされたあと、数ヶ月「どうやって死ねるだろうか」と思い続けていました。しかし、よく考えると「歩けなくなったイコール死にたい」のではないのです。歩けなくなったから普通の人間ではなくなった。だから人としての価値が落ちてしまった、と自分を卑下していました。

私はもう、この世の中で誰からも必要とされなくなったのではないだろうか、以前の友達が前のように付き合ってくれないのではないだろうか、まるで自分だけが別の世界に取り残されたような気持ち、疎外感、孤独が「死」を結びつけていました。そんな時、当時の恋人が言った言葉。

「ひとみにとって、僕が必要なのではなく、僕にとって、ひとみが必要なんだ」

誰かが私を必要とってくれる。それが肉親ではない、他人が。この事実がどれほど、私を勇気づけてくれたことでしょうか。見える部分の障害だけが障害ではないわけです。

五体満足であっても自ら命を絶つ人が増えています。理由は様々であったとしても、共通していることがあります。

21世紀は心の世紀と言われています。心穏やかに生きるために私達に必要なことは何か。私達にできることは何か。気負わず、身近なことから一緒に考えましょう。

基調講演

鈴木 ひとみ

はじめに

私が、なぜ車いすの生活になったかという、大阪で銀行に勤めていたときに、ミスインターナショナルの準ミスに選ばれました。夫と出会ったのはそのころでした。1年の任期を終え、しばらく銀行に勤めていましたが、上京してファッションモデルになり1年半が経過したときです。

事故に遭った日も、撮影で山梨県の甲府に行った帰りでした。カメラマンの運転する車の助手席にデザイナーが座り、後部に私が座っていました。

10分ほど走ると、青空が急に曇り、やがて雨になりました。車は横を走っているトラックと接触事故を起こしそうになり、慌てたカメラマンは急ブレーキを踏みました。車は横滑りし、トラックにぶつかりくるくる回り、助手席のデザイナーは外に放り出され亡くなりました。

私は、後ろの窓ガラスを突き破り100メートルほど飛ばされ、路肩の土の上に落ちました。幸い命はとりとめたが、首の骨を折りました。

命をくれたキス

大月の病院から、東京の病院に救急車で運ばれました。病院に着くとすぐに手術室に運ばれました。ストレッチャーで運ばれ、手術室の前に着いたとき、当時の恋人だった夫が私にキスをしました。目を開けようと思うが目が開きません。人間の体温、唇の温かさ、それが動かない身体の細胞にずっと伝わり「生きろ」って言っているのだと思いました。

死をみつめて

手術の後、最初は自分がどのような身体になったのか全く理解ができませんでした。首の骨が折れたのですから、首は動かすことはできない、寝返りを打つこともできない、病室のベッドの上で、ただ天井を見続ける毎日でした。

入院をして10日目に主治医がこう告げました。「ひとみちゃん、多分君の脚は動かないだろう。」先生の話聞いたとき、ただ信じられない。自分のこととしては受け止められませんでした。

それからしばらくの間は、「どうやれば死ねるのか。」そればかりを考えていました。しかし、よく考えると、脚が動かないイコール死にたいではないのです。脚が動かないことで普通のひとでなくなった、誰からも必要とされていないという思いで、無性に淋しくて孤独だった。自分を半人前の人間として卑下する、劣等感、孤独、これが死に結びついていたのです。

勇気をくれた手紙

人の温かい励ましで生きる力をもらったり、人とのかわりによって喜んだり泣いたりすることがあります。私が生きようと思ったきっかけは、けがをして3ヶ月後にもらった恋人からの手紙でした。

こんなことが書いてありました。「とりあえず5年、いや3年でもいいから頑張ってみようよ、それでもがんばれなくなったら、生きることに疲れたら、そのときは一緒に死ねばいい」病室のベッドで何度も繰り返し手紙を読みました。

私のために泣いてくれる人がいる、その人が一緒に生きようと言っている。たとえ結婚できなくても私は生きていけると思えるようになりました。

結婚しようかどうか迷っているとき、彼がこんなことを言いました。「ひとみにとって僕が必要なのではなく、ぼくにとってひとみが必要なのだ。」誰か私を必要とってくれる人がいる。これが私を元気付け、励ましてくれました。

ある看護師との出会い

私の障害は、頸椎の6、7番目を折っています。今だと自立できますが、20年前は、自立できるかどうかの境目でした。そんなとき、ある看護師との出会いで精神的に強くなりました。

トイレができたときです。

入院中にトイレの便器に移る練習をしていましたが、腹筋、背筋がないためどうしてもでき

ませんでした。トイレと便器の間に落ちどうしてもできません。リハビリの先生が「できないね」と打ち切られたのです。

そんなとき、ある看護師さんが助けてくれて、トイレに移る練習を再開しました。そしてトイレに移れたのです。

私は、このトイレに移ることができなければ結婚していなかったと思います。



明日に向かって

障害者にありがちなのが「自分は他の人より劣ってしまった。後の人生はあきらめの人生なのだ。」しかし、残された体の機能によって、今までと違うことができる可能性があります。だれか他人と比べるのではないし、自分の前の生活と比べるものではないと思います。

残された体の機能に期待して、最大限の努力をし、社会に貢献するべきだと思います。

これは、障害者だけではなく、ここにおられるすべての人に課せられたことだと思っています。

● パネルディスカッションの発言要旨 ●

● コーディネーター



**た ぶち とし き
多 淵 敏 樹** (兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所長)

1933年兵庫県生まれ。1965年神戸大学工学部建築学科卒業。1997年2月神戸大学副学長で定年退官。神戸大学名誉教授。同年4月から兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所長、放送大学兵庫学習センター所長。2000年に放送大学を辞して大手前大学社会文化学部教授（現在は学部長）。専攻は建築史・建築計画。福祉のまちづくり。

ユニバーサル社会の環境整備

兵庫県では平成4年10月に、高齢者や障害者を含むすべての人々がいきいきと生活できる福祉のまちづくりを推進するため、全国の都道府県に先駆けて「福祉のまちづくり条例」を制定いたしました。その後2度改正され現在の条例となりましたが、制定したときから常にわが国で最も進んだ内容の条例として、他の都道府県の模範となっております。

われわれの福祉のまちづくり工学研究所は、主として工学に関する総合的な研究開発を行うことにより、福祉のまちづくりを支援するため、平成5年10月に条例の施行にあわせて設置され、現在は5課体制で、そのうち第1課から第4課までで研究開発に取り組んでおります。

研究所では研究成果を広く県民に提供する手法の一つとして福祉のまちづくりセミナーを開催しており、本年度で第12回目の開催です。ユニバーサルデザインに関しては平成9年度に「ユニバーサル・デザインのまちづくり」、同10年度に「ユニバーサル・デザインのものづくり」を開催してきました。

さらに、平成15年度からは、福祉のまちづくり条例を基に県の施策全般にユニバーサルデザインの考え方を取り入れることになったのを受けて、年齢、性別、障害の有無、国籍などの違いを超えて、だれもが安心して暮らし、元気に活躍できる「ユニバーサル社会づくり」を中心に据えて研究を展開しています。

「ユニバーサル社会づくり」では、「ひと」「もの」「情報」「まち」「参加」という5つの分野での取り組みを示す「ユニバーサル社会づくりの総合指針」が示されることになっています。ユニバーサル社会の実現のためには、人々の「こころ」の問題がきわめて大切であると思われます。

今回のセミナーでは、基調講演で「心の絆」をテーマにお話し頂き、パネルディスカッションで、「ひと」「もの」「情報」「まち」「参加」の各分野で活躍されている方々をパネリストにお招きして、「ユニバーサル社会づくり」の実現のための具体的、実践的な方策についてご意見をいただき、今後の「ユニバーサル社会づくりの環境整備」について、ご参加頂いた皆さんとともに考えたいと思います。

パネルディスカッションの発言要旨



すずき 鈴木 ひとみ (エッセイスト)

「ひと」という視点から

車椅子生活も今年20年になりました。私自身は受傷当時から現在まで、障害が重くも軽くもなっていない、むしろ加齢により、力は落ちているにも関わらず、車椅子生活が楽になってきました。それはこの5年、格段にアクセスがよくなったおかげです。

今やバリアフリーという言葉は誰も知っているくらい、行政後押しの下に、駅や新しいビルのエレベーター設置や段差解消が進みました。商売としても無視できないほど高齢者が増え、二匹目のドジョウが得意な日本では、競って良い製品が世に出るようになってきました。

アクセスと同じくらい提供する側の理解や使用する側のモラル、傍観者の意識向上がなくてはならないことは、承知のことでしょう。お互いの慣れによって解消されることもあります。学校教育の中で介助の仕方や本人になったような体験を取り入れるのも1つの手でしょう。また、東京や地方など、地域によって、障害者に対する温度差がある気がします。

「じろじろ見ては失礼だ」という気持ちなのか、東京の人達は障害者に限らず、人と目を合わせないように生活しているようです。「この段差をあげてもらう」ために、声をかけようと思っても、目を合わせないのでいつまでも頼めない、という例。学校教育が終わった人に対する啓発には「ほんのちょっとした介助の仕方」をテレビで5秒10秒くらい短いCMを繰り返し流すという方法はどうだろうか、ある一時期にあった政府広報のような長くて、ただ情に訴えるものではなく、実践的に役立つもの。

東京で暮らしながら年間80回日本の各地に行く、また年1ヵ月半海外へ行く経験を通して「ぎくしゃくしない」ひととの関わりについて、一緒に模索していきたい。

「ひと」という視点から

鈴 木 ひとみ

私を助けてくれた大きなことは、ひとつは夫（恋人）、ひとつは自動車の運転ができたこと、もうひとつはおしゃれです。指に障害があり、ボタンを引っ掛けたり、チャックをつまむのは得意でないので、何もないトレーナー、ゴムのついたジャージをはいていました。

彼は、そのころから、私を病院の外に連れ出すようになりました。早く社会になれたほうがいいと考えたようです。

彼は、人のいるところに連れていきました。そのころは、意地になっており、心から外出を楽しむのにはもっと時間がかかりました。

最初は病院の近くのお蕎麦屋さん、そのうち、渋谷、新宿といったおしゃれな店に変わっていきました。

でも、どこでもトレパン姿だったら恥ずかしい、相手に恥ずかしい思いをさせたくない、その一心で、普通の服を着る訓練をしました。

あるとき、次の外出の服装を考えながら、充実した気持ちになっている自分に気づきました。「おしゃれをすることの喜び」モデル時代には気づかなかった、その喜びを感じていました。

また、病院の単調な生活に甘んじていた私にとって、心地よい緊張感がありました。

このことは、高齢者も同じだと思います。服を変え、外出をする。日常生活に変化をつけることにより、緊張感が出て、生きることの張りになるのだと思います。

講演で色々なところに行きますが、ある所の保健師に相談されました。

「自分の担当に27歳の脊椎損傷で車いすの男性がいるが、外出しようと説得しても外に出ない。どうすればよいのか。」と聞かれました。

「外に出なくてもいいのではないか。」と応えました。

一般の人は、障害者が外に出てニコニコ人と交わるのが良いといいますが、一般の人でも外に出ていつも、ニコニコと人と交わっているわけではありません。

一日家にいて、パソコンをする人、ゲームをする人、家にいるのが好きな人は多くいます。「障害者になったから外に出なければいけない。」のはおかしいと思います。

「もしその人が外に出たいと言えば、いつでもお手伝いしますと答えたら。」と言いました。

よくあるのが、障害者と関わりを持つ人にありがちなのが「保護者になりたがる」、子ども扱いをすることです。

障害者を一人の大人として見て欲しいと思います。

パネルディスカッションの発言要旨



たつ ぐち りゅう そう
竜 口 隆 三 (TOTO UD研究所長)

1969年、東陶機器株式会社に入社。1994年より水まわり設備機器・福祉機器を中心としたバリアフリー化の研究・開発業務に従事し、2002年4月よりUD研究所(ユニバーサルデザイン)を同社内に設立、初代所長に就任し、現在に至る。「国際ユニバーサルデザイン協議会」理事など外部の要職も務め、水まわり設備におけるバリアフリー、ユニバーサルデザインの分野で活動中。

公共トイレに共通ルールを

最近、公共トイレの設備はウォシュレットの設置が進み、また使用者が何もしなくても自動的に便器洗浄する非接触センサー感知式便器が登場するなど、ずいぶん進化してきた。しかし、このことにより“トイレ内操作系設備の多様化による利用者の混乱”という新たな問題が生まれてきた。公共トイレは、ユーザーの皆さんが初めて利用する場合も多く、「トイレの流し方が分からなくて困った」「呼出ボタンを便器洗浄ボタンと間違えて押してしまい、係員さんが飛んできて恥ずかしい思いをした」等という経験をされた方が、数多くいる。この問題は視覚に障害がある方やお年寄りの方はもちろん、公共トイレを利用する全ての人に共通の問題である。

私たちは多数の方が利用する公共トイレでは“どこのトイレに行っても設備機器の取付位置や操作方法が同じで分かり易いこと”が重要と考えている。そこでTOTOではこれらの問題を解決すべく東洋大学と共同研究を行ない、その成果として、今後公共トイレにおける《大便器まわりの操作系設備の共通ルール》を具体的な形で提案する。

その共通ルールの第一弾は【大便器まわりの操作系設備の「壁面配置」】である。

内容について少し詳しく説明すると、

- 1) 対象とする場所：腰掛便器が設置されるすべての便房（一般トイレ及び多目的トイレ）
- 2) 対象とする設備：①紙巻器、②便器洗浄操作部、③トイレ呼出ボタン
- 3) 共通ルール1：腰掛便器まわりの操作系設備は、便器の左右いずれか一方の横壁面の操作しやすい位置にまとめて設置する。
共通ルール2：腰掛便器横壁面に設置する主要3設備（上記①②③）は
 1. 紙巻器の真上に便器洗浄操作部を
 2. 便器洗浄操作部の便器後ろ水平方向のある程度離れた位置にトイレ呼出ボタンをという「L字型の位置関係」になるように配慮し、これ以外の設備の有無に関わらず、この配置は変えないことを原則とする。

視覚に障害をお持ちの方は普段は一般のトイレを使用する。しかし駅などで混雑していて危険と感じた場合などは多目的トイレを使用されることもある。だから一般トイレから多目的トイレまで、すべての便房で配置の標準化を図って行かなければならない。私たちは業界標準としてこのルール化を進めていきます。

公共トイレに共通ルールを

竜 口 隆 三

シーン検証

TOTOの製品は、小さな子どもから高齢者まで、また障害のある方など誰もが、トイレ、浴室、キッチン、洗面所といった水周りを使えるようにものづくりを進めています。TOTOのユニバーサルデザインは、子供づれ、妊婦の方、高齢の方、車いすを使う人、オストメイトの方までユーザーの対象を広げ、シーン検証を徹底的に行っています。

シーン検証の一例ですが、トイレでは便器の後ろのロータンクの上に手洗器がついているものと、手洗器が別に設けられたものがあり、子どもから高齢者まで「ひとに優しいトイレ」の比較評価をしています。タンクの上に手洗器があるものは、小さな子どもは便ふたの上に登って手を洗うことがあり、バランスを崩すと非常に危険です。高齢者にとって手洗いは別にあったほうがいいのですが、子どもにも別の方が安心して使えるという検証をしています。また得られたデータはカタログにして、設計事務所やゼネコン等に活用されています。

公共トイレの標準化

公共トイレを、車いすの方が使うときはどうすればよいのか、という研究に長年取組んできましたが、視覚障害の方から「なぜトイレの洗浄ボタンとか、紙巻器の位置がバラバラなのか」という苦情が最近増えてきました。

また、約2,500万人いる65歳以上の方々も、いずれは目がぼやけるという状態になることが考えられます。このようなことを踏まえ、公共トイレにルールを作る、このことにより皆に優しいトイレになると考えています。

現場を調べてみると、紙巻器や押しボタンの配置が結構バラバラでした。

どのようにするかというと、紙巻器を見つけると、その上方に水を流すボタンがある、その後ろ方向に非常コールがある、この3つだけでよいのです。

ウォシュレットや手洗器は、設置されたりされなかったりしますので、今回は3つのルール化を図るものです。そして皆さんが使用される一般のトイレから多目的トイレまで、腰掛便器が付いているトイレ全てを共通ルールにします。そうすることにより本当に皆に優しいトイレになるのです。

また、ルール化は1企業でやることではなく、経済産業省、国土交通省や各自治体などいろいろなところと連携していく必要があります。

TOTOが公共トイレの研究をはじめて約40年になりますが、この間約1億5,000万個の商品を出荷し、全ての国民に使っていただいております。

それだけ社会的責任があり、新しく出す商品、現在ある商品の仕様の見直しを図り、ユニバーサルデザイン度を上げていきたいと思っています。



パネルディスカッションの発言要旨



あま かわ よし み
天 川 佳 美 (株)コー・プラン取締役)

1950年生まれ。1974年～1986年(株)都市・計画・設計研究所、1986年～(株)コー・プラン取締役。1997年～有限会社 きんもくせい (代表取締役)。阪神・淡路大震災直後、阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワークで、復興に向けた情報発信紙「きんもくせい」を発行。阪神市街地緑花再生プロジェクト「がれきに花を咲かせましょう」を展開し、解体跡地の緑花活動。「ランドスケープ復興支援会議」阪神グリーンネットとして専門家の花やみどりのまちづくり活動に参加。「コレクティブハウジング事業推進応援団」を結成、復興公営住宅の推進や入居支援に加わる。

ユニバーサル社会における「まちづくり」

近頃、よく耳にする「ユニバーサル」という言葉は「万能」、「普遍的」とか「全世界の」というのが本来の意味です。

しかし、「ユニバーサルデザイン」とつくと、「障害の有無にかかわらず、だれもが無理なく利用できる商品やサービス、また、家・まちなどの設計」ということになります。

では、「ユニバーサル社会」というのはどんな社会のことなのでしょうか。

私は建設コンサルタントの会社にたまたま勤めることになって30年が過ぎます。その間に阪神・淡路大震災に神戸市灘区で被災いたしました。

被災と申しまして、お借りしていた事務所が全壊し、仕事場が少し不自由になったことぐらいで、自宅も壊れず、けがもいたしませんでしたので、仲間とすぐに支援活動を始めることができました。

約10年の間に学ぶことができた私にとっての「ユニバーサル社会」とは

1. 自分の住んでいるところで、様々な日常生活が賄える社会

歩ける範囲で買い物ができ、銀行、幼稚園、小学校などがあり、図書館や公園という施設もあれば、おおむね全ての人にやさしいまちではないでしょうか。

2. いろいろな人が混じりあって生活をし、お互いがいつでも助け合え、支えあうことができる社会

外国人や単身者、学生、また小さな子供を持つ比較的若い層の家族や、介護を必要とする高齢者家族がいざと言う時に助け合え、支えあえるまち普段からのおつき合いが必要です。どこにどんな人たちが住んでいるのかを解りあえることが重要です。

3. 小さな範囲でも1や2のような「まち」が少しずつ重なりながら、次々とつながって大きな都市になっている社会

このような小さな単位でも暮らしやすいまちが連続し、繋がっていることで構成された都市は災害時や緊急時にも多くの助けを必要とする前に自分達で手立てが持て、それが普段の暮らしやすさからなる安心感になると思います。

ユニバーサル社会における「まちづくり」

天 川 佳 美

都市計画コンサルタントの会社に30年間勤めておりまして、最後の10年が震災後の10年になります。

私なりに、住みよい、安全な、安心なまち、ユニバーサルな社会について話します。

震災の後、がれきを取り除いた「まち」にお供えの花がたくさんありました。それは非常に悲しい風景でした。お供え花より、全面に花が咲いたほうが、住んで居られる人や、尋ねて来る人が少しは元気になるのではないかと考え、多くの専門家や仲間に支えられ、その年の5月に神戸や芦屋の空地に花の種を蒔きました。「がれきに花を咲かせましょう」という活動です。

神戸の長田区にも花の種を蒔きました。長田区は大きな火災がありましたし、家屋の倒壊も大変なところでした。外国人が身を潜めるようにして仕事をしながら住んでおられる地域もありました。

こうした外国人たちは、言葉が通じませんでした。どこが避難所なのか、どこに行けば情報が得られるのか、水はどこでもらえるのか、何もわからないという人が沢山おられました。私たちも気を配る余裕がありませんでした。

そんなことで種まきをしたときも外国人に説明をしましたが全く通じていませんでした。でも、一生懸命にくわをふるい、たねを蒔き、水をやり、7月には見事なひまわり畑ができました。



長田区海運町のひまわり

そのとき思ったのは、住んでいる人たち、そこで仕事をしている人たちが毎日つながっていなければならない、ということでした。少しでもつながってさえいれば、その日に困ることは少なかったと思ったのです。

その後、この地区にある鷹取カトリック教会では、ボランティアがFM局を作り、ベトナム語や韓国語、フィリピン語などの放送を始め、言葉のわからなかった人たちが助けられました。

震災は非常に悲しいものでしたが、一面では多くの勇気をもらいました。私にはそのことがこの10年の何よりの宝物だと思っています。

普段から、あの角に一人暮らし老人がいる、あそこには小さな子ども抱えたお母さんだけの家族がいる、そういうこと知っている。生活の中で、隣の人を少しでも思いやる気持ちがあればいざと言う時にずいぶん違います。

何かが起ったとき、すぐに見渡せるまち、歩ける距離で用が足せるまち、そこで皆の力が発揮できるような仕組みが平常時からあるまち、そんなまちが小さくても少しずつ重なって大きなまちになっていく、そういう社会が「ユニバーサル社会」ではないかと思います。

パネルディスカッションの発言要旨



いま い ゆう じ
今 井 裕 二 (国立神戸視力障害センター厚生労働教官)

1967年生まれ。高校2年の時に目の病気のため陸上競技を一度は断念したが、22歳で再開。現在は神戸ユニバスポーツクラブに所属し、伴走者とともに一般大会参加を目指している。視力は両眼とも光覚弁。2000年シドニーパラリンピック三段跳6位、走り幅跳7位入賞。1998年・2003年視覚障害者世界選手権三段跳銅メダル、2003年日本マスターズ（一般）400m 4位。

自分に何ができるのか

現在私は、ユニバスポーツクラブに所属し、伴走者をはじめ多くの仲間と共に仕事の後、陸上競技のナイター練習に励んでいる。このクラブは老若男女・障害の有無など関係なく市民の誰もが参加でき、一人一人が自分の目標に向かって汗を流している。

私は、網膜色素変性症という病気により現在は光を感じるほどの視力である。小学生の頃から徐々に視機能が低下していき、中学から始めた陸上競技も高2の夏にドクターストップがかかり、断念せざるを得なかった。その後も視機能が低下し続け、一時は見えなくなることへの不安感や失望感から将来に対する目標をなくし、生きる希望も見失っていた。そんな時、親友や恩師の叱咤激励により、障害から発生するできない事ばかり考えていた自分に気がついた。出来る事を探していける自分を目指そうと思った。

22歳の春、治療師を目指し盲学校に入学。そこで新たな陸上競技に出会った。全盲のクラスメイトが音に向かって全力でダッシュをしている。「あっ、これだ。」と思った。目が見えなくても耳で感じ取ればいいのだ。徐々に恐怖心も取れていき、全力で走れるようになった。ジャンプも出来るのではないか。踏切地点から呼んでもらえば、助走距離や方向・歩数をフィードバックできないものか。試考錯誤により、少しずつ遠くに跳べるようになった。その後11年かかったが、念願のシドニー・パラリンピックの舞台で跳躍することが出来た。

次の目標としたのは、高校時代に断念せざるを得なかった一般大会への出場であった。他の選手と一緒に走るためには、一つの輪にしたロープを伴走者と共に握って走ればいいのか。まずはロードレースで試したら、うまく出来た。その次は短距離である。長距離以上に歩幅や腕振りなど、息が合わないとうまく走れない。伴走者捜しに難航していた3年前、野口君に出会った（当時大学生）。練習を繰り返すうちに息もぴったり合ってきた。一般大会参加を考えたが、障壁が立ちはだかった。伴走者と走るためには2レーンが必要になる。また、他の選手と安全に走れるか心配であるといった理由で許可されなかった。しかし、2年前兵庫マスターズという年齢別の一般大会参加が許可された。20年ぶりに同年代の選手と走れる喜びは格別だった。視力を失った自分が、伴走者と共に再び競技できる喜びを感じている。去年は、マスターズの日本選手権にも参加し、400mで4位入賞を果たした。次は、高校生や大学生なども出場する大会に参加していきたい。

陸上競技だけでなくさまざまな場面において、障害の有無に関係なく共に自然な形で参加できる「ユニバーサル社会」の進展を願っている。

自分に何ができるのか

今 井 裕 二

会場の皆さんは、今、生きがいをお持ちでしょうか。

私は、20歳ぐらいまで生きがいはなにもなかった。生きる希望がなかったのです。今は、陸上競技が生きがいです。身体を動かすのは、目が見えていたときから好きでした。

目が見えなくなっても、もう一度競技ができないものかと思いました。そして、伴走者の野口さんが、一緒に走ってくれたり、跳ぼうと思えば声をかけてくれる。今、生きがいを持って生活をしています。

中でも、目標にしているのは、一般大会への出場です。高校2年の夏にドクターストップで競技を止めたことから、特に高校生と一緒に走りたいと思っています。

陸上競技の前は、野球やサッカーをしていましたが、視力より視野が低下して小さなボールから見えなくなりました。さらに陸上もできなくなりました。

高校3年生ごろには文字が揺れだし、読もうと思っても読めなくて、頭が痛くなってくる。これもできなくなった。自分の中で、「見えなくなっていて、できなくなってくる。」ことが恥ずかしく、人には言いませんでした。

不安と恐怖に押しつぶされそうになったとき友達が「人間は、生きて何ぼのもん。楽しいこと、苦しいこといろいろあるが死んだら終わりや。」と言いました。この言葉をきっかけにいろいろできることになり、徐々に考えるようにもなりました。

それまで、後ろを向いてもがいていたものが、だんだんと前を向くようになりました。

自分の仕事についても自立しようと考え、兵庫県立盲学校に入学しました。

驚いたのは、グラウンドでピュロピュロという音が聞こえ、全盲のクラスメートが、ダッシュしています。「これだ」と思いました。

「見えなくても耳を使えばいいのだ。」

それから陸上競技を始めましたが、始めはなかなか足が前にでなくて「音の方をめぐめて走ればいい。」と言われ、走れるようになりました。

走れるようになれば、次は「跳ぶ」始めはその場で跳んで、それから砂場の前に行って一歩だけ跳ぶ、「今度は助走したい。」手を叩いてもらったり、声で呼んでもらう、曲がっていたら「少し右。」と声をかけてもらいながら助走をしました。

陸上を再開して、11年目にシドニーパラリンピックに出場できました。みなの前で、パフォーマンスができるという喜びを体験しました。

次に思ったのが、一般大会への出場でした。いろいろのことで走れなかったが、マスターズで同年代の選手と走れました。次の目標として一般大会に出て行こうと思います。

パネルディスカッションの発言要旨



きた やま いち ろう
北 山 一 郎 (福祉のまちづくり工学研究所主任研究員兼研究第二課長)

1953年生まれ。1978年から社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団玉津福祉センター研究員、義肢装具の研究開発に従事。1993年、同事業団による兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所の運営受託に伴い、同研究所研究第四課主任研究員。2002年から同所主任研究員兼研究第二課長、現在に至る。情報バリアの解消を目指したコミュニケーション機器・システムの開発に従事。博士（工学）。

ユニバーサル社会における「情報」について

“だれもが、多様な方法で、わかりやすい情報を手に入れ、交換できる社会に”、兵庫県が提唱する「ユニバーサル社会」をつくる基本理念の一つです。これらの実現のため、行政情報のユニバーサル化、生活情報・災害情報などの提供、情報格差（デジタルデバイド）の解消が目標にあげられています。

近年、情報通信技術（ICT）の発展はめざましいものがあり、特に、文章の読み上げソフトや、携帯電話のメールは、非常に多くの障害者の情報格差の解消に役立つ画期的なものであります。前者により、視覚障害者はメールやインターネットの閲覧が可能となり、後者により、聴覚障害者は、携帯電話のメールによって手軽に相手と情報のやり取りができるようになりました。

その一方で、多くの高齢者や障害者はそれらから取り残される傾向にあるのも事実です。研究所では、個々のニーズ、施設のニーズ、福祉のまちづくりに求められる課題を明確にし、それらに対応する新たな機器、システムの開発を通して、これらの方々の情報バリアを解消していきたいと考えています。

今回、携帯電話を用いた聴覚・言語障害者のための緊急連絡システム“チャット119”と、タッチパネルや音声によってメールやインターネット閲覧ができる高齢者のためソフトウェア“ユニバーサル伝言板”を中心に、音響式信号機や徘徊の見守りシステムなどユニバーサル社会の情報伝達に役立つシステムの研究をできる限り多く紹介したいと思います。

今年は、台風23号をはじめとする数々の台風の上陸、新潟県中越地震など多くの災害に見舞われた年でもありました。新聞の記事によると、停電でファックスや防災行政無線が使用不能となり、聴覚障害者や高齢者等に緊急情報が伝わらなかったことが報道されています。防災情報の伝達のあり方、防災に役立つ照明のあり方などにも研究の成果を上げていきたいと考えています。

ユニバーサル社会における「情報」について

北 山 一 郎

誰もが多様な方法で、分かりやすい情報を手にいれ、交換できる社会。兵庫県が提唱するユニバーサル社会をつくる基本理念のひとつです。

これを実現するためのキーワードとして、行政情報のユニバーサル化、生活情報、災害情報の多様な方法での提供、情報格差の解消の3点があります。

研究所では、情報弱者のニーズを明確にし、それらに対し次に紹介をするような取り組みを行っております。

始めに、キーボードを使わずにメールの送受信やホームページの閲覧ができる、主に高齢者を対象としたシステム「ユニバーサル伝言板」を紹介します。

ユニバーサル伝言板は、市販のパソコンにタッチパネルやウェブカメラ、スキャナーを組み合わせて使います。このシステムを使うと、手書きのメモをスキャナーで取り込み、画面に触れてメールを作成し、登録している人に送ることができ、また、携帯電話にも送ることができます。このシステムには、リハビリテーションに使えるようにゲームの機能もあります。

次は、事故が発生しても音声で通報できない聴覚障害者のための緊急連絡システム「チャット119」を紹介します。このシステムでは、事故の発生後、2、3の選択肢を選ぶだけで、すばやく第一報を送ることができます。そして、消防局に接続後は、チャットという方式を使い、GPSを使った場所情報の送信を含めて、消防局と繋がったまま情報のやり取りができます。



三つ目は、病院や施設の利用者の方の見守りシステムです。病院や施設入所者の方々に、院外に出ると危険な状況になる方があります。開発した見守りシステムは、利用者がタグを持ち、例えば玄関を通過すると、ナースコールに通知され、看護師が案内・誘導を行うことができます。

以上、三つの研究事例を紹介しました。

研究所では、個々のニーズ、施設のニーズ、福祉のまちづくりに求められる課題を明確にし、対応する機器、システムの開発を今後も積極的に進めていきます。

第31回国際福祉機器展参加報告

兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所 小山 美代

本機器展は、今回で31回となり来場者130,000人をこえ、出展企業は国内外14ヵ国1地域 645社・団体にいたり、盛大なものであった。

なお、来場者数の内訳の詳細については<http://www.hcr.or.jp/>参照。

○ ユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインという文字を会場のあちこちで目にした。

ユニバーサルデザインの商品を集めたコーナーがあり、若者を中心にたいへん混雑していた。カラフルでデザインが斬新、そして見ていて楽しいため、若者の関心をひくのであろう。中でも靴のエース(株)の担当者と話したが、かなりのユーザーニーズの抽出を行っているそうである。このコーナーには、①(株)三栄水栓製作所のカラフルでかわいい形をしたレバーハンドル ②シチズンCBM(株)の文字が大きくわかりやすいデジタル体温計などの健康機器、時計が展示されていた。ユニバーサルデザインは、「楽しさ」も大きなキーワードだと感じた。

○ 転倒予防や転倒防止、パワーリハビリ

この3文字も会場のあちこちでみられた。介護予防という視点からの商品開発

が目新しい。従来は転倒しても衝撃を和らげるマットが主流であったが、高齢者が転倒しないよう、訓練するマットが展示してあった。マット上でバランストレーニングができるものである。

ところで、名古屋にある労災リハビリテーション工学センターが、大腿骨頸部骨折シミュレーション装置を開発していた。大腿頸部骨折や脊椎圧迫骨折の危険がある転倒挙動を再現し、ヒッププロテクターの衝撃緩和の効果や転倒床面に対する影響などを検証するものである。



パワーリハビリは厚生労働省が今後の介護予防サービスメニューに加えているためか、リハビリ機器の展示スペースがたいへん広く、また混雑していた。パワーリハビリ機器はかなり高価なものであり、在宅ではなく施設やディサービスなどで活用されるのであろう。その他、新規性のある優れたものをいくつか紹介する。

《コミュニケーション関連機器等》

高次能機能障害者のリハビリ・生活・就労支援するソフト「メモリアシスト」があった。このソフトは、パソコンから作業手順やスケジュールなどを携帯性に優れたPDAに表示しするものである。※高次脳機能障害とは、外傷性脳損傷や脳血管障害による後遺症で、記憶、注意、作業遂行などに関わる認知機能障害をいう。

子どものための「ぴぴっとフォン」というPHSが展示されていた。連絡先は○△□の3つだけである。あらかじめ、主要な電話番号を3つ○△□で登録しておくものである。防犯ブザー付である。子ども用となっているが、お年寄りや知的障害者にも使用できそうである。

◆(株)トヨタ PiPitwebホームページ

<http://www.pipit.ne.jp/>

《徘徊関連機器》

施設や病院などでは、転倒・転落防止にマット式の徘徊・離床報知器がよく使われている。従来、マットの配線につまづいて危険なことがしばしばあったが、新たに無線式の徘徊マットが開発されている。この機器の携帯受信器には、一台で5人の識別ができるようになっている。ポータブルコール：(株)テクノスジャパン

◆参照 <http://www.technosj.co.jp>

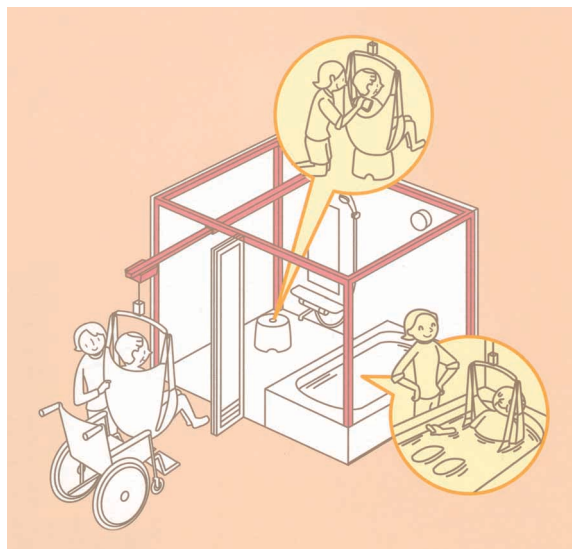
《住宅関連機器》

既存のユニットバスに後付けできる簡易型リフトが展示されていた。4点の柱があるため、昇降位置を自在に決めることができ、狭い入り口でも使用できる。在宅介護において、リフトに不慣れなヘルパーでも、取扱いがややらくになる。介護保険対応の用具となっている。また、

ホテルや旅館の浴室などにも後付け可能であるため、需要が高まりそうである。

バスパートナー湯ニット：明電興産(株)

◆参照 <http://www.meidenkohsan.co.jp>



《車いす》

電動ティルトとフルリクライニング機能を兼ね備えた電動車いすが参考出展されていた。このような電動車いすは欧米ではすでに市販されているが、わが国では製品としてはまだ市販されていない。つぎに、目を引いたのはPermobil社（スウェーデン）のホイールベースを可変できる電動車いす(トラックス；写真1参照)である。狭い場所では、ホイールベースを短くして通常の電動車いすと同じような使い方をし、屋外等では長くして、通常の電動車いすより安定な走行ができる。



写真1 ホイールベース可変EWC

アシステック 掲 示 板

研究所だより 第4回公開講座を開催して

平成16年9月11日(土)と18日(土)の2日間、「高齢者・障害者のためのコミュニケーション支援」をテーマに公開講座を開催しました。

今回は、高齢者や障害をお持ちの方が生活する上で直面するコミュニケーションの不自由さや、それらを解消する支援機器、用具について、講義や実技、グループ討議を通じて学んでいただきました。

1日目は、講義「コミュニケーション、生活支援機器の概要」及び「支援機器、用具、システムの試用体験、及びスイッチ制作の実技」を行いました。実技では、マウスの左クリックを代用する押しボタン型スイッチの加工、取付けを行い、加工したスイッチを用いて障害者向けのソフトの操作を体験しました。半田こてを握るのは初めてという方も、お互いに助け合いながら完成させることができました。

2日目は、西脇市民病院の作業療法士嶋尾秀昭氏による「コミュニケーション、生活支援事例について」の講義のあと、グループ討議を行いました。「高齢者・障害者のためのコミュニケーション支援について—こんなものがあったら—」のもと、①使いやすいパソコンとは、②扱いやすい携帯電話とは、③パソコンからほしい情報、④こんなものがあったら、というようなテーマに対し、各グループに分かれて非常に活発な討議が行われました。最後に、グループ代表により集約した意見のプレゼンテーションが行われました。例えば携帯電話に関しては、“とにかくシンプルにする”、“ボタンごとに色を変える”などアイデアが出されました。



図2 嶋尾秀昭氏による講義



図1 スイッチ制作の実技

電話に関しては、“とにかくシンプルにする”、“ボタンごとに色を変える”などアイデアが出されました。

講義の後、受講者の方から、良い経験をさせていただきました、という声をいただきました。来年また新たなテーマで公開講座を実施すべく、準備を進めております。

アシステック通信

第44号 2005年(平成17年)2月



編集・発行
社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団
総合リハビリテーションセンター
兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所
〒651-2181 神戸市西区曙町1070
TEL078-927-2727(代) FAX078-925-9284
<http://www.assistech.hwc.or.jp>



編 集 後 記

今回は、第12回福祉のまちづくりセミナーの内容を中心にまとめています。セミナーでは、220名の方々に参加していただき、たいへん盛況な催しとなりました。また、昨年9月に開催した第4回公開講座も定着してきているように思います。これからも、研究所の活動内容をお伝えしていきます。